

『失われた時を求めて』邦訳版と邦訳者

田 中 幸 作

On Japanese Translators and Japanese Versions of *A la recherche du temps perdu*

Kousaku TANAKA

Key words

Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, japanese version, japanese translator

はじめに

文学作品から漫画、研究書から実用書に至るまであらゆるジャンルの翻訳が溢れている。日本におけるそれらは、日本の小説や漫画などの翻訳本が時折話題となるように、日本語から他言語への翻訳の場合もあるが、多くは日本語への翻訳である。邦訳書のおかげで、原書に依ることなく色々な情報を手軽にそして速やかに手にすることが可能となっている訳である。しかし、様々な翻訳の中であって、特に文学作品の翻訳においては、単に情報伝達における利便性が優先され求められている訳ではないだろう。多くの読者は、文学の地平にある芸術性と呼ばれるものが、原著同様なレベルで翻訳に内包されていることを期待しているのである。文学の翻訳においては、伝達すべき情報の中心に芸術性が息づいているべきであると言えよう。

さて、マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』（以下、RTPと略す）の新訳二種類が、時を争うかのように、個人全訳により刊行中である。ひとつは、岩波文庫の吉川一義訳であり、もうひとつは、光文社文庫の高遠弘美訳である。現在、吉川訳については2010年11月より出版が始まり四巻⁽¹⁾が、高遠訳については2010年9月より出版が始まり二巻⁽²⁾が、既に出版されている。吉川訳、高遠訳どちらも文庫本全十四巻に収まる予定である。RTPの邦訳の歴史は長いですが、これらに先行する個人全訳としては、1996年から2001年にかけて集英社より単行本で刊行され、その後2006年から2007年に文庫本として再刊された鈴木道彦訳と、RTP初の個人全訳である1973年から1982年に筑摩書房より刊行され、その後、1984年から1989年にプルースト全集として、また1992年から1993年にちくま文庫として再刊された井上究一郎訳がある。以上のように、RTPの個人全訳の邦訳については、現在、刊行中のもも含め四名の手による翻訳が存在している。

本論では、これら四名の翻訳者によるRTPの邦訳に見出すことができる日本語表現の差異や個性を比較しながら、一般的に晦渋な文であるとの印象を持たれている原文と訳文との関連を再考することにより、いわゆるターゲットテキスト⁽³⁾ (target text) が、多様な形で生まれ存在していることの意味や成り立ちについて考察する。

なお、ソーステキスト⁽⁴⁾ (source text) について論じる場合には、RTPにおける翻訳底本の複数の刊行や決定稿の不確実性の下、プレイヤッド旧版と新版共通に決定稿として扱われている箇所、

※ E-mail koutnk@ha.shotoku.ac.jp

ならびに、ヴァリエントを有しない箇所を扱うことにより、考察すべき原著と翻訳との関係があまりに複雑になることを避けた。また、四名の翻訳者には、それぞれに RTP の部分訳があり、特に鈴木・井上兩名には個人全訳による複数の版があるが、現時点における最終の版である光文社文庫版・岩波文庫版・集英社文庫版・ちくま文庫版を邦訳決定版として扱い、本論においては、それぞれを、高遠版・吉川版・鈴木版・井上版と称している。

I

最初に、これら四名の翻訳に対する姿勢について触れておきたい。

1953年3月から1955年10月にかけて新潮社より、日本における RTP の初めての全訳が刊行された。七名の分担訳による七巻本であった。その後、1958年に新潮文庫十三巻に収められ、1974年には新潮社より七巻本で再刊された。文庫版では、1954年に刊行されたいわゆるプレイヤッド旧版が反映され、訳文に若干の手直しが行われた。1974年の再刊にあたっては、「元の版（＝文庫版）にほとんど手を加えることなく、誤字、難読の訂正、ひらがな表記など最小限にとどめた」ことが、編集部あとがきに述べられている。この再刊は、70年代当時の読書好きに RTP 通読の機会をもたらし、1973年より九年間をかけ筑摩世界文学大系中の五巻本として順次刊行された井上究一郎個人全訳と共に、長編小説 RTP の存在をあらためて世に問うきっかけになったと思われる。井上個人全訳は、1984年の『プースト全集』刊行の際には、原著の最大の特徴である長文をそのまま邦訳に反映させるという試みによる変貌を経て、最終的に、1987年刊行のプレイヤッド新版をはじめ、新たに出版された複数のテキストを参照する機会を持った結果、1992年刊行のちくま文庫十巻に姿を変えることになった。長大な RTP は、全篇を原著で読み通すことさえ大変なことであるが、いずれにせよ、読むという文字・文章の概念化によって生じる形象をさらに正確に別の言語に置き換えるという翻訳作業がついに単独で行われ、個人全訳の出版が実現したのであった。

そして、ちくま文庫版発刊からちょうど四年後、1996年より約五年間をかけて集英社より鈴木道彦個人全訳が刊行された。この個人全訳に先立ち、鈴木道彦は、RTP を部分訳の形で発表する中で、井上訳の問題点に触れ、井上訳の一文一文が長すぎて読みづらいことなどを挙げ、あらためて翻訳は、「一番目に原文の正確な把握、そして分かりやすい明快な訳文」であるべきという基本を指摘した。また、2006年の文庫版には、「この機会に、私はあらためて全体にわたりフランス語原文と照合して翻訳に手を加え、不備を正し、訳文を整えるとともに、訳注もすべて見直した。恐らくこのような全面的な改訳は、これが最後の機会になるだろう。その意味で、今回出版されるのは私の決定訳と言えるものである。」との表明が謳われている。

そしてさらに四年が経過した2010年、時を同じくして、二種類の個人全訳の刊行が始まった訳である。吉川訳と高遠訳の登場である。

吉川訳の訳者あとがきには、翻訳の方針が詳しく述べられている。一部を抜粋すると、「本訳の方針は、プーストの原文に忠実で、読みやすい翻訳をめざすことに尽きる。原文のダッシュはもとより、プースト特有のリズム、微妙なニュアンスを最大限に反映したうえで、読みやすく、ずっと頭にはいる訳文たらんとした。」と始まり、さらに、「あれこれ悩んだあげく私が到達したのは、可能なかぎり元の語順を尊重するという方針である。(中略) できるかぎり語順を尊重すれば、(中略) やむをえず途中で句点を打っても元のフランス語のリズムは保持されるのではないかと考えたのである。元よりフランス語の語順と完全に一致する日本語訳をつくるのは不可能だが

ら、あくまで基本方針と考えていただけるとありがたい。」と述べている。先行の井上訳と鈴木訳、それぞれの不足部分を埋め合わせることができるであろう恐らく唯一の方法と工夫が示されている。語彙の多さ、比喩の連続、関係詞節の広がりなどによって、RTPの随所に一文が恐ろしいほどの長文によって表現されている箇所があるが、その長い一文を、原文通りの一文を保つためのただ一つの句点に拘ることなく、フランス語の語順を守りながら、日本語表現としての自然さや読みやすさを優先するためにあえて句点を複数用い、短めの文を並べるという方法である。吉川訳において採用された翻訳方法は、フランス語を母語とはしないが、フランス語にある程度慣れ親しんだ者が、RTP原書を読む時、コンパクトな段落単位や節単位で先ず部分を解釈し、行ったり来たりしながら、それらを順序良く繋げ長文全体を理解しようとする姿に重なるようにも思われるのである。しかし、勿論、吉川訳自体は、日本語を母語とする読者を対象としているのであるから、部分を解釈する速度は当然のこと、部分が全体に収まる速度も格段に速まるのであり、このことも言語間翻訳の大きな役目の一つであると捉えなくてはならないと考えられる。

最後に、高遠訳であるが、現時点において、二巻目（RTP第1篇「スワン家のほうへI」第二部スワンの恋、第三部土地の名・土地）までの刊行である。同時進行ながら、吉川訳は既に四巻目まで刊行されているので、少なくとも高遠訳の三巻目と四巻目の上梓の際には、それらは最新の翻訳として扱われることとなる。さて、一卷目の冒頭に掲げられている「訳者前口上」において、翻訳者は、「(略) 翻訳に当たってはなるべく読みやすいように工夫したが、それでも、原文の呼吸を生かすべく、ダッシュや括弧を多用して、息の長い訳文にしたところがないわけではない。どうか、そういうところは、一行一行丹念に、行きつ戻りつしながらゆっくりお読み頂きたい。改行も原文のままである。」と述べている。前述の吉川訳の場合の句点に代わり、句と句をダッシュにより繋ぎ、また括弧を用いた文の挿入により、長文が有している語順やリズム、つまり「原文の呼吸」と呼んでいるものを、必要な場合には訳文に反映しているので、「ゆっくりお読み頂きたい」と述べている。停滞感を伴う読みが必要な箇所が、RTPにおいては、長文を中心に本質的に存在するが、読みの速度が加速しがちな母語による翻訳においても、読みの速度に配慮した訳を心掛けたということであろう。また、同じく一卷目の巻末にある「読者ガイド」において、翻訳者は、RTPの複数の既訳に見つかる翻訳者自身の解釈との相違に関する具体例を掲げて、正確な翻訳の必要性を訴えている。さらには、既訳に見つかる日本語のリズムや表現に関しても「私の神経を逆なでする部分にしばしば突き当たることになったのだ。」と、強い調子で述べている。

RTPの個人全訳は、以上のように、改訂されたり、新規の刊行が行われる都度、既訳の弱点の手直しが行われ、翻訳者自身の文体に対する嗜好が反映されたりする。後発の翻訳者は、既訳を参照することが可能であることや草稿研究をはじめとする最新の研究成果を利用できること、またあらたな底本の使用などにより、自らの翻訳をさらに斬新なものとする立場に置かれているのである。

RTP翻訳に際しての翻訳者の姿勢は、以上のように概観することができる。それでは、それぞれの邦訳の個性と工夫、また、そこに見られる差異を訳文の中に具体的に追ってみたい。

II

最初に、RTP第一篇『スワン家のほうへ』第一部コンプレー前半部より短めの一節を選び、対応する四種類の邦訳を原文と共に並べてみる。

- A-0 J'entendis les pas de mes parents qui accompagnaient Swann; et quand le grelot de la porte m'eut averti qu'il venait de partir, j'allai à la fenêtre. Maman demandait à mon père s'il avait trouvé la langouste bonne et si M. Swann avait repris de la glace au café et la pistache. (I p. 34) ⁽⁵⁾
- A-1 私はスワンを送ってゆく人たちの足音を耳にした、そして庭の入口の鈴で、いま彼が出ていった、と知るとすぐに窓ぎわに寄った。ママが父にたずねていた、——いせえびをおいしいと思ったか、スワンさんはコーヒーとピスタシオ・ナッツとのはいったアイスクリームのお代りをしたか。(井上訳 p. 57) ⁽⁶⁾ (訳文中の下線は論者による、以下同様)
- A-2 スワンを送る家の者の足音が聞こえた。そして門の鈴が、スワンの行ってしまったことを知らせるやいなや、私は窓のところにとんでいった。ママは、父がイセエビをおいしいと思ったかどうか、スワンさんはコーヒーとピスタチオのはいったアイスクリームのおかわりをなさったかどうか、とたずねている。(鈴木訳 p. 87)
- A-3 スワンを送ってゆく両親の足音が聞こえた。そして門扉の鈴の音でスワンの帰ったのがわかると、窓辺に飛んで行った。お母さんは父に、イセエビはおいしかったか、スワンさんはコーヒーとピスタチオ入りのアイスクリームのおかわりをしたかと訊ねていた。(吉川訳 p. 85)
- A-4 スワンを送ってゆく家の者たちの足音が聞こえた。スワンが帰ったことを知らせる門の鈴が聞こえるや、私は窓のところへ行った。お母さんはスワンが伊勢海老をおいしいと思ったか、コーヒーとピスタチオのアイスクリームをお代りしていたかどうかを父に尋ねている。(高遠訳 p. 92)

以上の抜粋は、幼い主人公《私》のコンプレ時代における原初体験のひとつである〈母親とおやすみのキス〉のエピソードに直結している一節である。主人公は、普段からあまり容易ではない母親とおやすみの挨拶を交わそうと独り二階の寝室でじりじりしている。来客の一人であるスワンが帰るまでは、彼の接待や給仕を務める母親とのキスは実現する筈もないというエピソードの導入部分の件である。

まず、抜粋した原文 A-0 には、複文三種類が見つかる。最初の二つの文は、セミコロンと接続詞 *et* で結ばれ等位構造となっていて、先頭の文は関係節、二番目の文は副詞節と名詞節を伴っている。最後の一文は、間接疑問節を伴っている。ピリオドは二箇所見つかると、A-2、A-3、A-4 においては、句点が三箇所用いられている。その内の二箇所はピリオドに対応しており、もう一箇所はセミコロンに対応しているので、句読記号の使用法としてのちぐはぐさはあまり感じられないが、その問題点については後述する。また、A-1 のみ、句点の使用はピリオドに対応する二箇所に残っているが、A-0 には無い接続符号ダッシュが用いられている。このダッシュは、原文と同じように、間接疑問節を主節に対して後置するための翻訳者の工夫であり、違和感の無い逐語訳調を実現している。ここで、邦訳の相違点についてさらに詳しく比較してみる。

原文 A-0 二箇所の主語 *je* の内、A-1 においては二番目の *je*、A-2 においては最初の *je*、A-3

においてはふたつとも、A-4においては最初の *je* が、翻訳文では訳出されていない。A-3のようにふたつとも主語が提示されないとなると、たとえそれらが日本語表現では省かれやすい人称代名詞であり、またコンテキスト上、大きな混乱が予想されないにしても、最も古い回想のなかにある出来事を語る語り手《私》ではなく、その出来事の主人公である《私》の存在があまりにも希薄になる恐れがあるように思われる。

次に、最初の二つの文に並ぶ単純過去（聞こえた）—前過去（知るやいなや）—単純過去（行った）は、過去の行為の継起の順を基本的に示すものである。しかし、前過去部分の名詞節に現れる近接過去（今しがた出て行った）の使用、またコンテキストから読み取れる主人公のはやる気持ちの下で、これらの出来事は、一時に進行したようなものであろう。そのような〈速度感〉を上手く訳出しているのは、恐らく翻訳 A-1 ではないだろうか。A-1 においては、出来事を細切りに提示する句点ではなく、読点によって文や節をすばやく結ぶことに成功している。さらには、先頭に代名詞《私》を一度だけ提示すれば、その後の人称代名詞の訳出を避けることが可能となり、やはり文をなめらかに結ぶことができると共に、半過去（ママが父にたずねていた）により提示されている情景を眺める主人公の存在に繋がる一人称を巧みに示すことができるのである。

また、間接疑問節を伴う文の主節で用いられている半過去形の訳が、二つに大別できる。A-1、A-3 では、それぞれ「たずねていた」、「訊ねていた」と過去形の訳となっているが、A-2、A-4 では、「たずねている」、「尋ねている」と現在形での訳となっている。訳文の「～ていた」と「～ている」という表現は、両者とも、継続的行為を示す半過去形の特徴を捉えてはいる。しかし、この訳出の差異は、半過去形が客観的には〈過去時制〉であることを優先するのか、あるいはまた、過去における一時的あるいは持続的行為や事実と同時進行する行為や事実の〈未完了の姿〉を優先するのかに依っていると考えられる。つまり、A-1、A-3 の訳では、回想の中にある最も初期の一連の出来事を語る話者としての《私》の存在が強調され、A-2、A-4 においては、その時その場にいた幼い主人公《私》の存在が明瞭となっていると言えよう。

最後に、これらの翻訳には、その他に次のような三点の差異が指摘できる。

原文の *les pas de mes parents* を、「両親の足音」と訳しているのは A-3 のみである。その他は、「送ってゆく人たちの足音」、「家の者の足音」、「送ってゆく家の者たちの足音」となっている。確かに *parent* には親戚・親族の意味があり、スワンとの会食の場には、主人公の大伯母や祖父も同席しており、両親は当然のこと皆でスワンを見送ったとすれば、その他のどの訳も成立する。しかし、スワンが帰るやいなや主人公が窓から眺めたのは、少なくとも会話を交わしている母親と父親なのであり、「(私の) 両親の足音」で良いのではないだろうか。

原文の *maman* は、「ママ」、「ママン」、「お母さん」と三種類の訳語が見つかる。この時点で、恐らく十歳に達してはいない主人公《男の子》の心情を、年齢や性別に見合った口調で如何に訳出すべきかというような事柄にも関連していこうと考えられるが、この三種類の訳については、翻訳者および読者の好みの問題もあり、それほど拘る必要はないのかもしれない。

原文の最後の一文は、ふたつの間接疑問節を有している。前半の間接疑問節内の主語人称代名詞 *il* は、A-1、A-2、A-3 の訳のように、直前の、主節内の *mon père* を受けていると考えるのが妥当であり、A-4 の訳のようにこの *il* をスワンと考えることには疑問が残る。ただし、原文や他の翻訳と特に比較することがなければ、A-4 のように読むことが可能となり、違和感が生じることはほとんどないのである。

III

さて、RTPの特徴のひとつに、冒頭部分の語り手《私》という存在が、作品の大団円において、主人公である少年《私》の最終的な望みであった作家となって語り始めたのか、あるいはそうではないのかについての解明を強いるかのように、読者を回想の始まりの冒頭部分へ再び誘う堂々巡り、言わば円環状の構造がある。このような終わりが始まりに結び付こうとするある種の永続する躍動の内に展開し、主人公《私》の非常に個人的な体験の意味を、語り手《私》が普遍化してゆく叙述の中では、〈一人称複数形〉が積極的に用いられる。そのような一般化が見られる一節を並べてみよう。

- B-0 Il en est ainsi de notre passé. C'est peine perdue que nous cherchions à l'évoquer, tous les efforts de notre intelligence sont inutiles. Il est caché hors de son domaine et de sa portée, en quelque objet matériel (en la sensation que nous donnerait cet objet matériel) que nous ne soupçonnons pas. Cet objet, il dépend du hasard que nous le rencontrions avant de mourir, ou nous ne le rencontrions pas. (I p. 44)
- B-1 われわれの過去もまたそのようなものである。過去を喚起しようとするのは空しい努力であり、われわれの理知のあらゆる努力はむだである。過去は理知の領域のそれと、その力のおよばないところで、何か思いがけない物質のなかに（そんな物質があたえてくれるであろう感覚のなかに）かくされている。その物質に、われわれが死ぬよりまえに出会うか、または出会わないかは、偶然によるのである。（井上訳 p. 74）
- B-2 私たちの過去についても同様だ。過去を思い出そうとするのは無駄であり、知性のいっさいの努力は空しい。過去は知性の領域外の、知性の手の届かないところで、たとえば予想もしなかった品物のなかに（この品物の与える感覚のなかに）潜んでいる。私たちが生きているうちにこの品物に出会うか出会わないか、それは偶然によるのである。（鈴木訳 p. 107）
- B-3 われわれの過去も、それと同じである。われわれが過去を思いうかべようとしても無駄で、知性はいくら努力しても無力なのだ。過去は、知性の領域や、その力のおよぶ範囲の埒外にあり、われわれには想いも寄らない物質的対象（その物質的対象がわれわれにもたらす感覚）のなかに隠れている。この対象にわれわれが死ぬ前に出会えるか出会えないかは、もっぱら偶然に左右される。（吉川訳 p. 110）
- B-4 私たちの過去もそれと同じである。過去を思い起こそうとするのは無駄な行為である。知性のあらゆる努力はむなし。過去は知性の領域の外、知性の手の届かないところで、何か具体的な、私たちが考えもしなかった事物の内に（そうした事物が私たちに与える感覚のなかに）隠れている。死ぬ前に私たちがそうした事物に出会うか出会えないかは偶然による。（高遠訳 p. 115）

以上の抜粋は、主人公《私》の幼いながらも固い意志を伴った我儘な欲求であった、〈母親とのお休みのキス〉が実現したその嬉しさと、主人公の意志に負けた母親の悲しみを同時に味わうこととなったコンプレーの一夜の回想の中であって、どんどん遠ざかり記憶から薄れてゆく過去というものの実相に迫ろうとする語り手《私》の思いが語られている一節である。

原文 B-0 の翻訳におけるキーワードは、四人の訳出が全て異なっている *en quelque objet matériel* (…) *que nous ne soupçonnons pas* という表現における普通名詞 *objet* であるであろう。B-1 においては「何か思いがけない物質のなかに」、B-2 においては「例えば予想もしなかった品物のなかに」、B-3 においては「われわれには想いも寄らない物質的対象のなかに」、B-4 においては「何か具体的な、私たちが考えもしなかった事物の内に」と翻訳されている。

quelque objet matériel の単語単位の語義や訳語については、以下のようになる。

quelque——不定形容詞である。ここでは、被修飾語 *objet* が可算名詞単数であるので、ほとんど不定冠詞と同じ働きをする。訳語は「ある、何らかの」となるが、多くの場合、訳出の必要がないと考えられる。

objet——普通名詞である。語義が相当広い。「物、事物」に始まり、「品物、道具」、「対象、テーマ、客体」、「目的、意図」、文法用語の「目的語」等の訳語がある。

matériel——ここでは、形容詞である。「物質的な」に始まり、「実際の、具体的な、実質的な」等の訳語がある。

翻訳者は、各々が抱く原文のイメージの下で、これら幅のある訳語を取捨選択しながらひとつの表現に繋ぎとめているのである。さて、四種の訳語、「物質」、「品物」、「物質的対象」、「事物」の内、特に、「品物」という訳出は、一般に商品を思い起こさせる語であり、違和感を覚えるものとなっている。抜粋 B-0 に続く直前のパラグラフには、「ケルト人の信仰では、亡くなった人の魂が、動物・植物また無生物 (*une chose inanimée*) の中に囚われ、そのように魂を閉じ込めている木の間近を行き過ぎ、魂を閉じ込めている物 (*objet*) に触れると魔法が解け、魂は再びわれわれと共に生きることができるのである。」との記述がある。このような精神世界にある〈物〉とは、恐らくひとつひとつの品物や事物だけではなく、精神が捉えようとする物質的な対象全てのことであるだろう。そして、このようなコンテクストを踏まえると、いわゆる直訳調であるのだが B-3 「物質的対象」という訳が、原文を一番上手く反映する訳出とこの場合なっていると言えよう。また、B-4 「何か具体的な…事物」という表現は、パラグラフ全体も含めて、読みやすく分かりやすい訳出となっている。

次に、原文 B-0 においては、主語人称代名詞として四箇所、目的補語人称代名詞として一箇所、所有形容詞として二箇所の計 7 箇所に一人称複数が使用されている。それらを邦訳の中に探ると、B-0 において四箇所に見つかる主語人称代名詞 *nous* は、B-1、B-2 においてはそれぞれ一箇所のみ使用となり、B-3 が三箇所、B-4 が二箇所での使用となっている。また、原文において一箇所見つかる目的補語人称代名詞 *nous* は、B-1、B-2 では訳出されていない。二箇所の所有形容詞 *notre* については、B-1 では二箇所共、それ以外の邦訳では一箇所の訳出となっている。つまり全体としては、訳出が減少する訳である。恐らくこのことは、日本語表現における主語の自然な省略や名詞が元々限定詞をあまり必要としないことなどに関っていると考えられる。さらに、例えばこれら一人称複数に関する語の使用が二箇所となっている B-2 と五箇所で使用されている B-

3の翻訳における相違の理由は、RTPの邦訳に臨む翻訳者それぞれの姿勢や方針が一番の大きな要因であると考えられる。B-2鈴木訳の姿勢は、一文一文の長さに気を配り、日本語としての分かりやすさを優先しており、B-3吉川訳の方針は、原文の語順を保った訳出に拘っているのである。一人称複数の代名詞や所有形容詞などには、RTPにおける様々な概念の普遍化を推し進める役割が与えられていると考えられるが、邦訳においては、それらの省略があっても、日本語の性質上、文意が成り立つのである。

その他に、B-1、B-3における「われわれ」、B-2、B-4における「私たち」のように、人称代名詞の訳出に違いがある。このような表現の選択は、主観的また感覚的なものであると言えよう。

人称代名詞全般に関しては、作中人物の置かれている時代背景、社会的地位、職業、家族構成、年齢、性差、地域性などが訳語に客観的に反映した巧みな訳出と、翻訳全体を通じての訳語の統一感を勿論保たなければならない。

IV

最後に、若干長めの一節を取り上げてみる。なお、翻訳については、現在刊行中の吉川訳と高遠訳の二種類⁷⁾を並べた。

C-0 C'est ainsi que je restais souvent jusqu'au matin à songer au temps de Combray, à mes tristes soirées sans sommeil, à tant de jours aussi dont l'image m'avait été plus récemment rendue par la saveur — ce qu'on aurait appelé à Combray le «parfum» — d'une tasse de thé et, par association de souvenirs, à ce que, bien des années après avoir quitté cette petite ville, j'avais appris au sujet d'un amour que Swann avait eu avant ma naissance, avec cette précision dans les détails plus facile à obtenir quelquefois pour la vie de personnes mortes il y a des siècles que pour celle de nos meilleurs amis, et qui semble impossible comme semblait impossible de causer d'une ville à une autre — tant qu'on ignore le biais par lequel cette impossibilité a été tournée. (I p. 186) (下線は、論者による)

C-1 そんなふうにならば私がしばしば明け方まで想いかべたのは、コンブレー時代のこと、眠れなかった悲しい夜のこと、最近になって一杯の紅茶の風味——コンブレーなら「香り」と呼んだにちがいないもの——からイメージがよみがえった多くの日々のこと、さらに思い出の連鎖により、私の生まれる前にスワンがした恋について、この小さな町を離れて何年もたってから細部まで正確に聞かされたことである。これほどに正確な情報は、われわれの親友の生涯よりも、むしろ何世紀も前に死亡した人物の生涯に関してこそ容易に入手できるものだ。それが不可能に思えるのは、ある町からべつの町へ通話するのが昔なら不可能と思えたのと同じで、不可能を回避する妙手を知らないだけの話である。(吉川訳 p. 394)

C-2 こうして私はしばしば朝まで、コンブレーで過ごした時間や、眠れない悲しい夜や、最近、一杯のお茶の味——コンブレーの人間ならお茶の「香り」というところだろうが——によって立ち返ってきたあまたの日に、そして、私が生まれる前にスワンが

経験した恋愛について、この小さな町を離れて何年も経ってから、細部まで正確に——ときとして、親友たちの生活より、何世紀も前に死んだ人々の生活に関してのほうがずっと簡単に細部まで知りうるものだ（もっとも、不可能を可能にする手段を知らないかぎり、離れた町にいる同士が話をするなど考えられないのと同じで、かような正確さはありえないように思われるだろうが）——私が知ったことに思いを馳せた。（高遠訳 p. 430）

以上の抜粋は、RTP 第一篇第一部コンプレの最終パラグラフの冒頭部分であり、凝った比喻も見当たらない内容的にも分かりやすい一節である。すぐ後に続く第二部には、三人称体による『スワンの恋』が控えている。

さて、取り上げたふたつの邦訳には大きな相異が感じられる。C-1 は概して読みやすく、C-2 は節や文の結び付きがはじめ判読しづらい。ところが、RTP の原文に触れたことがある読者は、この少々読みづらい C-2 の訳文に対して、ある種の親しみを恐らく覚えるのではないと思われる。その親しみとは、一言で言うならば、〈プルースト的〉調子への共感である。では、原文の個性が訳文にどのように反映しているのかについて探してみたい。

原文 C-0 は、プレイヤッド旧版では、十四行のまとまった文章となっている。八個のカンマと三本のダッシュ、一箇所の強調のための括弧、そして文末にピリオドを備えている。C-2 の翻訳者は、邦訳全体を通じ必要に応じて、日本語表現としては稀な長文を原文に呼応させるため、その訳出においては、十三箇所の読点、四本のダッシュ、強調のためと説明のための二箇所の括弧、そして文末に句点を用いている。原文と同じように句点の使用を文章末の一箇所に留め、さらに、原文より一本多いダッシュの使用、また更なる文の挿入のための原文には無い括弧の採用によって、文・節・修飾語が絡み合い長々と続く原文に似た訳文を再現しようとしているかのようである。ところが、C-2 において原文と重なる要素は、強いて言えば句点の使用を最後の一箇所に留めたということ以外、特に構文上は見当たらないほど変化している。まず、いくつかの訳出の省略が行われている。抽象的な語であるからこそ通常は訳出に固執するであろう関係代名詞 *dont* を伴う *image*、そして、*par association de souvenirs* に対応する訳は見つからない。さらに、原文にはない括弧を用いた文の挿入が行われ、パラグラフの先頭にある主節の述部が、最終行に大きく移動している。主節述部の提示が後回しになればなるほど途中の文意の繋がりは曖昧になるが、訳出の最小限の簡略化を行うことにより、文脈に生じる複雑さの拡大を抑えているのである。そして、このような訳出が、〈読み〉における停滞感や緊張感を生むための方法であるとすれば、C-2 は、逐語訳調とは異なる方法を用いて、プルーストの口調に接近できる邦訳の可能性を示している例であるだろう。

原文のイメージを優先して訳出する方法のひとつには、逐語訳調の採用があるが、一般的に逐語訳は読みづらく正確な文意を捉えるのに時間がかかる。ところが、C-1 では、全体の構文についても原文の順序が守られ、逐語訳が保持されているにも拘らず、邦訳として読みやすい印象を受ける。このことは、C-1 の翻訳者の姿勢のひとつである句点の多用に起因していると考えられる。日本語の場合、句点を多用すれば、明確に述部を示すことが可能となり、一文一文は読みやすく理解しやすくなるからである。ただし、そのようにして生み出された文と文との関係は、停滞を必要としない滑らかな読書の実現に伴って、緊張感の薄いものとなる場合があるであろう。

おわりに

翻訳に際して最も大切にしていることは「原文の正確な理解と訳語の的確な選択そして…」と、どのような翻訳者も同じような基本姿勢を述べているが、四種類の RTP 邦訳それぞれに見つかる特色については、次のようにまとめることができる。

RTP 個人全訳の先駆けと言えるちくま文庫版井上訳の特長のひとつは、句点の多用を避け、原文のピリオドに忠実に対応した訳出が行われていることである。本論で取り上げた A-1、B-1 および C-0 の訳出においてもそのことが守られている。その結果、時にはひとつのパラグラフに相当するほどの長文を持つ RTP 原文の特徴を、邦訳においても、明確に感じ読みとることが可能となっている。

集英社文庫版鈴木訳の特長は、日本語としての読みやすさにあると考えられる。例えば本論において、訳語としての的確であるかについて論じた B-2 に見つかる「品物」という訳出も、鈴木訳全篇を通して見出すことができる〈こなれた〉日本語の使用の下で行われたと捉えれば、大いに理解できるのである。また、鈴木訳における句点の多用は、読書における歯切れのよいリズムを生み、読みやすい印象の要因となっている。

最新の邦訳である岩波文庫版吉川訳の特徴は、いわゆる逐語訳を基本的に用いながら原文の語順や節の並びを優先した訳出となっている点にある。本論で扱った B-3 における一人称複数の主語人称代名詞、目的補語人称代名詞、所有形容詞の正確な訳出は、その一例である。また、句点の自由な使用によって図られた読みやすさと原文の語順の保持は、井上訳と鈴木訳の長所を活かしたものと言えるだろう。

そして、もうひとつの最新の邦訳である光文社文庫版高遠訳の特色のひとつは、訳出における柔軟さにあると考えられる。本論では、疑問点として取り上げた A-4 における主語人称代名詞 *il* を、父親ではなくスワンと解釈している箇所も、邦訳においては文脈上の大きな問題点は実際見えてこない。なぜなら、原文の中に直接確認することは困難であるが、料理作りに係わっていたに違いない母親が、料理の出来栄えやお客であるスワンや来客たちの料理に対する評判について、父親にあれやこれや尋ねると同じような会話の中の一部がピックアップされていると受け取ることもできるからである。また、C-2 に見られた読点の多用、ダッシュや括弧の自由な使用、そして文意を崩さない程度の訳語の省略等による訳出にも、臨機応変の柔軟さが活かされているのである。

さて、RTP の個人全訳による邦訳は、近い将来には四種類が出揃うことになる。新しく翻訳を始める者は、先行している翻訳つまり既訳があれば、それに対して最大限の敬意を払いながらも、より素晴らしいものを作成しようと躍起になるであろう。新たな翻訳に取り組む動機は、時代の変化や研究の進歩によってそれまでの既訳に満足できなくなったことが、引き金となっている場合も多いであろう。通常の読者も、多分に新しい翻訳のほうが様々な意味において多くの情報に裏打ちされた、より良いものとなっていると一般的に判断しているのではないかと考えられる。RTP 個人全訳に限れば、1973年の井上究一郎訳に始まり現在に至る約四十年の歴史がそこにあるのであるが、最新の翻訳の評価というものは、その時の流れをどう評価するのかということにも繋がる本来は大仕事であるであろう。刊行が始まったばかりと言える吉川訳と高遠訳は、その時の流れの最先端に位置している訳である。

最後に、拙論において、少し見え隠れした翻訳における不可思議な点について述べてみたい。

邦訳においては、句点を多用すれば、理解しやすい短めの文の列挙が可能となり、全体として読みやすくなり読書スピードは上がるが、文と文の関係は、句点によって区切られてしまっていることや、読書のスピードアップにより、捉えづらくなる。そこで今度は、読点を用いることで、文と文との関係を強め、また節の自由な挿入を図ってみると、文同士の繋がりは見えてくるが、その繋がりを探そうとして、読書スピードは落ちてくるのである。RTPのように、原著の読書において、元々立ち止まるような読み方が求められている場合、特に長文の段落においては、読点やダッシュを用いることにより、感覚的な読書のしやすさを避け、文の解釈を深めるゆっくりとした読書が求められる場合がある。原文を生かそうとして、また原文の有する構文を保とうととして、スマートな逐語訳を試みる場合もあるが、RTPにおいては、プールの独特な文体を、いわゆる意識によって作り直し、提示することが可能となる。このような文学作品の邦訳の場合には、原著全体の理解と同時に、あまりに細々とした部分の訳に拘ることなく、例えば段落内に必要な語句であるのか、また、作品の全体にとって必要な語句であるかどうかを決定し、時として、自由な訳が必要となるのである。原著は変えることができないが、翻訳は変化・転換の役目をもともと背負っているのだから。

注

- (1) 刊行済みの四巻は、1. スワン家のほうへⅠ 2. スワン家のほうへⅡ 3. 花咲く乙女たちのかげにⅠ 4. 花咲く乙女たちのかげにⅡ なお、吉川訳に関しては、紀伊國屋ホームページの〈書評空間 BOOKLOG〉に、阿部公彦の書評が見つかる。その書評の終わりの部分に次のような記述がある。「訳文は日本語としてもリズムがあって見事である。プールの長文を切らないように、しかも順番通りに訳すように心がけたという訳者はたいへんな苦勞をしたのだと思うが、ひとつひとつの句や節や文の意味が丁寧に読者に差し出されていて、まさにじっくり読むに値する文章になっているし、いたずらっぽく意表をつくプールのとぼけた持ち味もよく伝わってくる。図版も豊富だから、読書に疲れたらながめるのもいい。現在第四巻までが既刊。この先も楽しみだ。」
- (2) 刊行済みの二巻は、1. スワン家のほうへⅠ 2. スワン家のほうへⅡ
- (3) 翻訳学用語である。翻訳学の入門書として、ジェレミー・マンディー『翻訳学入門』鳥飼久美子監訳などがあるが、それらの中では、source text は起点テキスト、target text は目標テキストと訳されている。ソース、ターゲット共に、カタカナ音で理解できるので、試験的に用いた。拙論は、上記の翻訳学入門書の大いなる刺激の下、書き進めたが、翻訳学そのものの反映は少なく、一種の文章論としての試みである。
- (4) 注(3)参照
- (5) (I p. 34) は、抜粋箇所を示す。『失われた時を求めて』プレイヤッド旧版第一巻34ページの意。以下同様である。なお、本論において比較検討した三種類の原文は、下記のような観点で選んだ。一番目(A-0)は『失われた時を求めて』の核と言い得る回想シーン中の話者と主人公《私》両方の存在が読みとれる件であること、二番目(B-0)は、読者、話者、主人公《私》が一体化したとも言える一人称複数を用いられ、『失われた時を求めて』の大団円において確固たる存在となる一人称複数が早くも提示された件であること、三番目(C-0)は、回想の中にあつた主人公《私》が話者に姿を変え、さらに一人称複数の提示が見られる件であること。つまり、『失われた時を求めて』の構造にも関っている典型的な《私》の提示箇所を取り上げている。
- (6) (井上訳 p. 57) は、抜粋箇所を示す。本論に説明があるように、井上訳=ちくま文庫第一巻57ページの意。以下同様である。また、鈴木訳、吉川訳、高遠訳についても、文庫版第一巻目よりの抜粋となる。なお、『失われた時を求めて』の複数の邦訳を並べて文章論的に比較検討したままとまった研究は恐らく無いと思われる。しかしながら、例えば『失われた時を求めて』冒頭の一句 *Longtemps, je me suis couché de bonne heure.* の邦訳の仕方をめぐっての様々な解釈や訳出の始まりは古く、昭和48年7月の日付の入った筑摩世界文学大系第

57巻付録の〈訳者のメモ〉を発端としている。これは、本論でも触れた井上究一郎による初めての個人全訳の第一巻に挟み込まれていた六ページからなる写真入りの小冊子である。日本におけるこの冒頭の一句に関する研究は、1993年11月に刊行された吉田城著〈『失われた時を求めて』草稿研究〉第一章一の「冒頭の一句をめぐって」によって、一旦終止符が打たれたと言える。刊行中の吉川訳と高遠訳が出揃った際には、解釈の上では勿論のこと邦訳方法においても、冒頭の一句との連関を看過できない最終巻最終行と比較することが必要であると思われる。

(7) 以下に、残りの井上訳と鈴木訳を示す。

「そのようにして、私はしばしば朝までじっと考え込むのであった、コンブレー時代のことを、眠られなかった私の悲しい夜のことを、またずっと現在に近くなって一杯の紅茶から——コンブレーでならみんなが、「かおり」と呼んだであろう味から——私に映像がよみがえったあの多くの日々のことを、そしてまた、回想の連合によって、この小さな町を去ってからずいぶん年月が経って私がかわしく知ったスワンの恋に関するのことを、その恋というのは、まだ私が生まれるまえにスワンが陥った恋であったが、ときにはもっとも親しい友人の生涯よりも数世紀前に死んだ人々の生涯のほうがかえって容易にそのくわしい細部までつかむことができるものなのだ、といってもそういうことは、たとえばある町からある町に電話することがかつては不可能であったように、回想の連合という便法を人が知らないかぎり、回避しえない不可能であったのだ。」

(井上訳 p. 311)

「こんなふうにして、私はよく朝まで考えつづけるのだった、コンブレー時代のことを、まんじりともしなかった悲しみの夜のことを、またごく最近に一杯の紅茶の味によって、——コンブレーでだったら、一杯のお茶の「香り」によってと言うところだろう——そのイメージが戻ってきた多くの日々のことを、さらにまた思い出の結合によって、私がこの小さな町を離れてから多くの歳月を経た後に、私の生まれる前にスワンが経験したある恋愛について細部まで正確に知ったことを。私たちはこんなふうには、自分のごく親しい友人の生活以上に、ときには数世紀前に死んだ人の生活に詳しく通じることがあり、またこのような正確な知識は、離れた町と町のあいだで話をするのが昔はとうてい不可能に見えたように、その不可能性を回避する方法を知らない限りは、およそあり得ないことに思えるものなのだ。」(鈴木訳 p. 391)

参考文献

I. テクスト (原書)

A la recherche du temps perdu, Bibliothèque de la Pléiade, 1954, 3 vol.

A la recherche du temps perdu, Bibliothèque de la Pléiade, 1987, 4 vol.

II. テクスト (邦訳)

『失われた時を求めて』井上究一郎訳 筑摩書房 文庫版10冊本1992年～1993年

『失われた時を求めて』鈴木道彦訳 集英社 文庫版13冊本 2006年～2007年

『失われた時を求めて』吉川一義訳 岩波書店 文庫版14冊本 (現在4冊刊行) 2010年～

『失われた時を求めて』高遠弘美訳 光文社 文庫版14冊本 (現在2冊刊行) 2010年～

III. 研究書等

ジェレミー・マンディー『翻訳学入門』鳥飼久美子監訳 みすず書房 2009年

伊原紀子『翻訳と語法——語りの声を聞く——』松籟社 2011年

吉田城『失われた時を求めて』草稿研究』平凡社 1993年

吉川一義『プルースト「スワンの恋」を読む』白水社 2006年

鈴木道彦『プルースト『失われた時を求めて』を読む』日本放送出版協会 2009年